

『日本アジア研究』第12号(2015年3月)

連体修飾節の形容詞的用法と心的走査

蔡 梅花*

本稿は、被修飾名詞を形式名詞「もの」と「こと」に限定し、被修飾名詞の性質の違いによって、形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形が選択されることを指摘し、その形態的特徴を記述した。更に、そこには事態を認識する人間の走査の仕方が関わっていることを考察した。

まず、「物的」な事象を表す「もの」を修飾する節には「タ」形が多く、「事柄的」な事象を表す「こと」を修飾する節には「テイル」形が多いことを指摘した。また、「タ」形と「テイル」形が使われる文の形態的特徴には、項の出現数が関係していること、つまり、項の出現数が多い場合は、「テイル」形が使われやすくなるが、項の出現数が減っていくと「テイル」形が減り、「タ」形が増える傾向があることを述べた。最後に、形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形は、事態を認識する人間の走査の仕方である「統括的走査」によるものであることを述べた。

これまででは、動詞分類から見たアスペクトの形式に関する研究が多く、被修飾名詞によるアスペクトの形式の選択に関する研究は少ないのが現状である。本研究はこの問題を解決することで、形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形が選択される条件を突き止めたところに意義があると思われる。

キーワード：項の出現数、順次的走査、統括的走査

1 はじめに

日本語には「眼鏡をかけた人」と「眼鏡をかけている人」のように、連体修飾節の「タ」形と「テイル」形が同一事態を表す用法がある。これを形容詞的用法と呼んでいるが、形容詞的用法に関して寺村は、「タ」形が「テイル」形より自然であり、形容詞的用法なら「タ」形になるのが普通であると指摘している。しかし、これまでの研究は、動詞分類から見たアスペクトの形式で、ほとんどのものは、被修飾名詞が実質名詞の場合であり、形式名詞¹の場合は研究されていないのが現状である。

日本語の形式名詞の代表的なものに「もの」と「こと」がある。具体的な物でも、抽象的な物でも、名詞は「もの」で表すことができるが、「こと」は違う。例えば、

- (1) しっかりしたものを選んだ。
- (2) 実家の倒産で多額の借金を抱えていることを隠していた。

* サイ・バイカ、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中、日本語学

¹ 形式名詞とは、名詞がその実質的な意味を失って形式的に名詞としての役割を果たすだけになったものである。

(1)の「もの」が指すのは「物」であるが、(2)の「こと」が指すのは「状態」である。例のように、「もの」の前には「タ」形が来ているが、「こと」の前には「テイル」形が来ている。「もの」と「こと」で違うアスペクトの形式が来ているということは、「もの」と「こと」の性質の違いによるものではないかと考えられる。

本稿では、被修飾名詞を「もの」と「こと」に限定し、「もの」と「こと」が「を」格²を取る連体修飾節を対象に、「タ」形と「テイル」形が「もの」と「こと」でどういうふうに変更されるのか、また「タ」形と「テイル」形の選択にどういう要素が関わってくるのかについて考察する。

2 形容詞的用法に関する先行研究

形容詞的用法に関する研究には高橋（1973）、寺村（1984）、金水（1994）、工藤（1995）、森田（2002）があるが、この中から「タ」形と「テイル」形の交替に関する研究である工藤（1995）と「タ」形の事態への捉え方の研究である森田（2002）を見ることにする。

連体修飾節のテンス・アスペクト体系をタクシス³の観点から説明しているものに工藤（1995）がある。工藤は、主体変化動詞は連体修飾節の「タ」形を「テイル」形に置き換えても文の意味が変わらない場合があるが、それは「タ」形の運動の限界達成後の段階と「テイル」形の結果段階が同時の時だと指摘している⁴。

従来の統語論とは違う観点からの研究に森田（2002）がある。森田は、「～タ」の本質を「時間観念の上に乗って過去か否かを弁別する働きではなく、話者の認識の有様を文脈に添えるものである。」と述べている。（p.282）また、連体修飾節の「何々した何」形式の意味について、「赤い靴を履いている女の子」と「赤い靴を履いた女の子」は「赤い靴の女の子」に相当する。つまり、被修飾名詞の属性所有として、その動詞本来の動作性の本義が文脈によって希薄になると、全体として体言的な意味になり、最終的には連体詞へと辿り着くと述べている。

以上、形容詞的用法に関する先行研究を概観したが、形容詞的用法が、「タ」形と「テイル」形の両形式を取ることは知られていても、両形式が使い分けられる条件についての分析は不十分であり、被修飾名詞が形式名詞の場合の研究はほとんど見当たらない。

² 今回「を」格だけを対象にした理由は、「もの」と「こと」の「が」格、「に」格まで入れると用例数が非常に多くなるためである。

「もの」と「こと」が「を」格を取る連体修飾節は、以下のようなものを指す。

例：・棚に並んだものを買って来る。

・仕事に取り組んでいれば飛行機に乗っていることを忘れることができる。

³ 出来事の時間的順序を「タクシス」と言う。

⁴ ・郷里に帰った時、旧友に会った。（工藤（1995）p.236）

＝帰っている

〈「帰る」という運動の限界到達が主文の出来事時以前＝限界達成後の段階と同時〉

・ちょっとサングラスをはずした間に、目に砂が入ってしまった。

＝はずしている

〈限界達成後の段階と同時〉

3 予備調査

形式名詞の前に来る「タ」形と「テイル」形が「もの」と「こと」でどういうふうを選択されるのかを検証するため、1985.1.1～2010.9.14の『朝日新聞記事データベース』を利用し、被修飾名詞「もの」と「こと」が「を」格を取る用例を収集した。その用例数を表1に示した。

表1 「もの」と「こと」の「テイル」形と「タ」形

動詞分類 ⁵	動詞名	こと		もの		
		テイル形	タ形	テイル形	タ形	
外的 運動動詞 ⁶	主体変化 動詞	抱える	202	7	3	2
		被る	6			
		着る	7	1	21	
		腐る	1		1	16
		籠る	3		1	5
		並ぶ	9	3	3	8
		乗る	38	41		1
	主体動作 動詞	歌う	4		1	3
		残す	63	59	3	98
		読む	4	8		
主体動作・客 体変化動詞	壊す	2	2			
	汚す	11			2	
内的 状態 動詞 ⁷	感情動詞	諦める	2	11		2
	感覚動詞	疲れる	10	2		
		震える	1			
静態 動詞 ⁸	関係動詞	依存する	35		1	
		位置する	12	1		
		意味する	5			1
		関係する	57	14		2
		関連する	31	4	1	8
		異なる	39	12		9
		違う	45	119	2	78

⁵ この動詞分類は工藤（1995）によるものである。

⁶ <外的運動動詞>は、時間のなかに成立（開始）・展開・消滅（終了）し、場合によっては結果を残す、ものの能動的な運動を捉えている動詞らしい動詞である。

⁷ <内的情態動詞>は、<外的運動動詞>と<静態動詞>のどちらにも所属させにくい動詞グループである。この動詞グループは<思考・感情・知覚・感覚>という人の内的事象を捉えている。

⁸ <静態動詞>は、時間のなかへの現象を問題にしえない<関係・特性>を捉えているか、時間のなかに現象したとしても、時間的展開性のない、<存在・空間的配置>を捉えている、スタティックなものである。

	空間的配置 動詞	似る	95	32	21	169
		面する	4			
		隣接する	6			
	特性動詞	しっかりする	12	3	4	102
		優れる	72	1	7	114
		精通する	10			
		馬鹿げる		41		2

表1を見ると、被修飾名詞が「こと」の場合は、「乗る」「読む」「諦める」「違う」「馬鹿げる」の動詞以外は「テイル」形が多く使われるが、被修飾名詞が「もの」の場合は、「抱える」「着る」「依存する」の動詞以外は「タ」形が多く使われていることが分かる。

例えば「乗る」は、「テイルこと」形の38例のうち6例が「軌道に乗っていること」の例で、「タこと」形の41例のうち17例が「軌道に乗ったこと」の例である。「違う」は、「テイルこと」形の45例のうち1例が「違っていることをやる」の例で、「タこと」形の119例のうち73例が「違ったことをする／やる」の例である。「着る」は、「テイルもの」形が21例で「タもの」形が0例であるが、ほとんどの用例が身に着用しているものを指す場合に使われている。

「乗る」「違う」のように同じ文脈では「タ」形が「テイル」形より多く使われているが、この予備調査は違う文脈で被修飾名詞が「もの」と「こと」の場合にどの形式が多いかを調査するものなので、異なり数で考えると、「乗る」も「こと」の「テイル」形が多く、「違う」も「テイル」形と「タ」形に大きな差が無いと思われる。つまり、この予備調査は、被修飾名詞が「もの」と「こと」の場合にどの形式が選択されるかを調査するためのものであり、同じ文脈で「タ」形と「テイル」形のどちらが選択されるかを調査するものではない。

この予備調査で次のような仮説が立てられる。

仮説1：

被修飾名詞が「もの」の場合は「タ」形が使われ、「こと」の場合は「テイル」形が使われる傾向がある。

4 仮説1の調査

4.1 対象

仮説1がより広い収集範囲を持つデータベースなどでも同様の傾向が示されるかを検証するため、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、被修飾名詞「もの」と「こと」が「を」格を取る用例⁹を収集した。

表1で挙げた動詞を中心に用例を収集したが、用例数が10例に満たさない動詞は同じ動詞分類に属している別の動詞と交替した。用例数が比較的多いと思われる23個の動詞を対象にしているが、その内<外的運動動詞>が8個、

⁹ 「もの」と「こと」の連体修飾節を「内の関係」、「外の関係」に分けていないが、その理由は、「もの」の連体修飾節はほとんど「内の関係」になるので、「もの」の用例数が0例になる動詞が多く比較にならないからである。

< 静態動詞 > が 13 個， < 内的情態動詞 > が 2 個である。

4.2 用例数

先ず，収集した用例の中から筆者が，形容詞的用法だと思う 266 例を日本語母語話者に見てもらおう対象にした。次に，その 266 例を意味の変わらない条件の下で，「タ」形と「テイル」形の交替が可能か否かを日本語母語話者 3 名に独立した形で見てもらい，3 名とも「タ」形と「テイル」形の交替が不可能だと判定した用例は排除した。その結果，合計 234 例の用例が残ったが，その内訳を表 2 に示す。中には用例数が 0 の動詞もあるが，それは，その動詞のすべての用例の「タ」形と「テイル」形の置き換えが不可能だという判定によるものである。

表 2 「テイル」形と「タ」形の用例数

動詞分類		動詞名	こと		もの	
			テイル形	タ形	テイル形	タ形
外的 運動 動詞	主体変化 動詞	抱える	2			
		着る			18	
		腐る				3
		籠る				1
		並ぶ	1			3
		乗る	2			2
	主体動作・客 体変化動詞	借りる		3		9
		残す				6
内的 状態 動詞	感覚動詞	疲れる	1			
	思考動詞	分かる	3			
静態 動詞	関係動詞	依存する				
		位置する	1			
		意味する	1		1	
		関係する	7			
		関連する	6	1	1	
		異なる	10	3		6
		違う	2		1	10
		似る	7	10	5	43
	空間的配置 動詞	面する	1			
		特性動詞	しっかりする		2	
	優れる		12		1	12
	精通する			1		
	馬鹿げる			19		3
	合計			234		

表 2 を見ると，被修飾名詞が「こと」の場合は，「借りる」「似る」「しっか

りする」「精通する」「馬鹿げる」の動詞以外は「テイル」形が多く使われ、「もの」の場合は、「着る」「意味する」「関連する」の動詞以外は「タ」形が多く使われている。中でも、用例数が多い「馬鹿げる」は全例が「タこと」形で、「着る」は全例が「テイルもの」形である。これは、「被修飾名詞が「もの」の場合は「タ」形が使われ、「こと」の場合は「テイル」形が使われる傾向がある」という仮説1の記述に違反しているので、統一的な説明のため、仮説1の修正が必要だと思われる。

そこで、さらに用例を分析したところ、項¹⁰の出現数により、「テイル」形と「タ」形が選択されているような形態的特徴が見られた。全体の用例を項の出現数で〈項が2つ以上ある場合〉〈項が1つの場合〉〈項がない場合〉に分けた。項の出現数による「テイル」形と「タ」形の用例数を表3に示した。

表3 項の出現数による「テイル」形と「タ」形の用例数

動詞名	被修飾名詞	項が2つ以上ある場合		項が1つの場合		項がない場合	
		テイル	タ	テイル	タ	テイル	タ
抱える	こと	1				1	
	もの						
着る	こと						
	もの			4		14	
腐る	こと						
	もの				2		1
籠る	こと						
	もの				1		
並ぶ	こと			1			
	もの				3		
乗る	こと	1		1			
	もの				2		
借りる	こと				1		2
	もの				3		6
残す	こと						
	もの		1		5		
疲れる	こと	1					
	もの						
分かる	こと	1		1		1	
	もの						
依存する	こと						
	もの						
位置する	こと	1					
	もの						

¹⁰ 本稿では、「もの」と「こと」の連体修飾節に現れた格助詞の付いたものを項と呼ぶことにする。

意味する	こと	1					
	もの			1			
関係する	こと	7					
	もの						
関連する	こと	6			1		
	もの	1					
異なる	こと	9	1	1	1		1
	もの		2		2		2
違う	こと	1		1			
	もの		4	1	4		2
似る	こと	6	5		5	1	
	もの	1	15	3	21	1	7
面する	こと	1					
	もの						
しっかりする	こと				1		1
	もの		1		7		6
優れる	こと	8		3		1	
	もの		7	1	3		2
精通する	こと		1				
	もの						
馬鹿げる	こと				10		9
	もの				3		

表3を基に、項の出現数で分けた動詞全体の「もの」と「こと」の用例数を表4に示した。

表4 動詞全体の項の出現数による用例数

被修飾 名詞	項が2つ以上 出現している場合		項が1つ 出現している場合		項が出現 していない場合	
	テイル	タ	テイル	タ	テイル	タ
こと	44	7	8	19	4	13
もの	2	30	10	53	1 (着る14)	26

表4を見ると、項の出現数で分けた場合、項の出現数とアスペクト形式の変化に次のようなことが観察された。それをまとめると、

観察：

- ① 項が2つ以上ある場合は、「テイルこと」形¹¹と「タもの」形が多く使われ、「タこと」形と「テイルもの」形は、ほとんど使われていない。

¹¹ 「精通する」動詞以外。「精通する」は、「テイル」形が0、「タ」形が1例である。

- ② 項が1つある場合は、「テイルこと」形が減り¹²、「テイルもの」形¹³と「タこと」「タもの」形が増えている。
- ③ 項がない場合は、「タこと」形と「タもの」形が使われ、「テイルこと」形と「テイルもの」形¹⁴は、ほとんど使われていない。

上の①～③の観察を図で示すと、

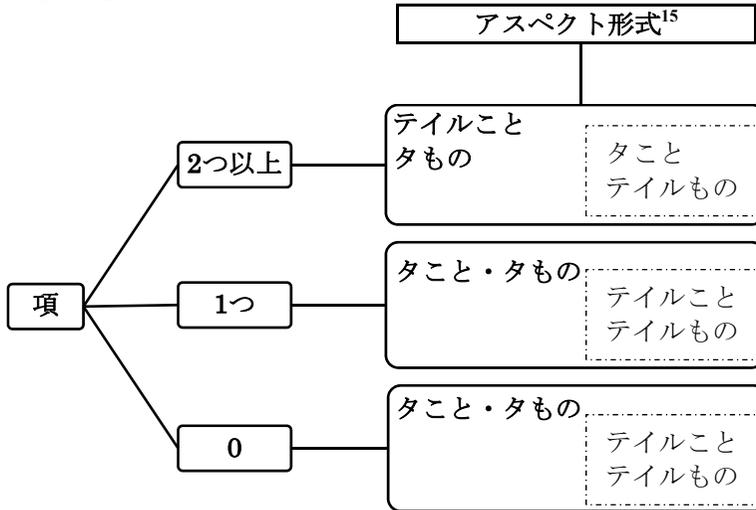


図 1 項の出現数によるアスペクト形式の変化

図 1 から、被修飾名詞が「もの」の場合は、「タ」形が多く、被修飾名詞が「こと」の場合は、項の出現数によりアスペクト形式が変化していることが分かる。これは、仮説 1 が大筋正しいが、被修飾名詞が「こと」の場合は修正が必要だと考えられる。そこで、項の出現数と仮説 1 の関係を仮説 2 として立てる。

仮説 2 :

被修飾名詞が「もの」の場合は、「タ」形が多く使われるが、被修飾名詞が「こと」の場合は、項の出現数が減っていくにつれ、「テイルこと」形から「タこと」形に変わる傾向がある。

4.3 結果

データを検証した結果、形容詞的用法で項の出現数が多いと、「テイルこと」形が多く、「テイルもの」形はほぼ使われないが、項の出現数が減ると、「テイ

¹² 「並ぶ」動詞以外。「並ぶ」は、「テイル」形が 0 から 1 例に増えた。

¹³ 「テイルもの」形が増えてはいるが、「タこと」形と「タもの」形に比べると少ないので、図 1 の「テイルこと」と同様に用例数が少ないほうに入っている。

¹⁴ 「着る」動詞以外。「着る」は、「テイル」形が 14 例ある。

¹⁵ 点線で囲んでいるのは用例数が少ない「もの」と「こと」の「タ」形「テイル」形である。

ルこと」形が減り、「タこと」形と「テイルもの」形が増える。「タもの」形は、項の出現数に関係なく多く使われている。この結果を図で示すと以下のようになる。

「こと」の場合			
事態の認識：	アスペクト的		形容詞的
アスペクト形式：	テイル	タ	タ
項の出現数：	2つ以上	1つ	0
アスペクト形式：	タ	タ	タ
事態の認識：	形容詞的		形容詞的
「もの」の場合			

図 2 項の出現数によるアスペクト形式と事態の認識の変化

図 2 から、形容詞的用法の中にも、より形容詞的用法の物とよりアスペクト的用法の物が存在することが分かる。5 節では、なぜこのような違いが出るのか、その原因を探ることにする。

5 「テイル」形・「タ」形と心的走査の関係

「タ」形と「テイル」形の中から 1 つの形式が選択されて使われるのは、人間が事態を認識する時に、いくつかある選択技の中からある 1 つの見方を採用しており、それが言語形式として現れていると考えられる。従って、以下のような考え方で捉えることはできないか。つまり、ヒトが対象を捉える 2 つの方式、コト的な捉え方とモノ的な捉え方、というものの反映として見ることはできないか。

5 節では「テイル」形と「タ」形が使われる構文的特徴とその構文でその形式が使われる原因を「統括的走査¹⁶」と「順次的走査」との関係から考察する。

5.1 「統括的走査」と「順次的走査」

人間が視覚などを通じて集められた情報がどのように処理されるか、これには 2 つの異なる処理の仕方が存在する。1 つは、「統括的走査」で、もう 1 つは「順次的走査」である。「統括的走査」と「順次的走査」について、F.ウンゲラーは、次のように定義している。

統括的走査においては、認知単位に反映された状況の諸側面が順次検認され、得られたデータが蓄積され、そして走査処理が完了した時には関係する側面のすべてが組み合わされて一つのまとまりないし「ゲシュタルト」に仕上げられる。この種の走査は名詞的なプロファイルに適している。領域全体を同時にアクセス可能にするので、名詞に典型的に見られるような意味の全体性を説明できるからである。(F.ウンゲラー、池上訳、1996、

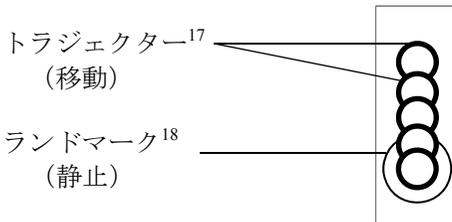
¹⁶ 本稿で言う「統括的走査」は、ラネカーの「累加的走査」によるものである。

p.235)

統括的走査に較べると、順次的走査は適用範囲が限られている。実際、これが使われるのは出来事（つまり変化を伴う過程）の場合だけである。統括的走査の場合と同様、当該の認知単位は次々と検認される。ただしデータが蓄積されるのは出来事のその段階の間だけである。このプロセスが終わると、出来事の次の段階に行き、そこで新たな走査データが集積される。これが続く。結果として、私たちは一連なりのエピソードに順次出会うことになる。このエピソードは相互に異なっているため、出来事に内在する変化を表すものとなっている。(F.ウンゲラー, 池上訳, 1996, p.235)

上の定義を図で示すと以下のようになる。

(a) 統括的走査



(b) 順次的走査

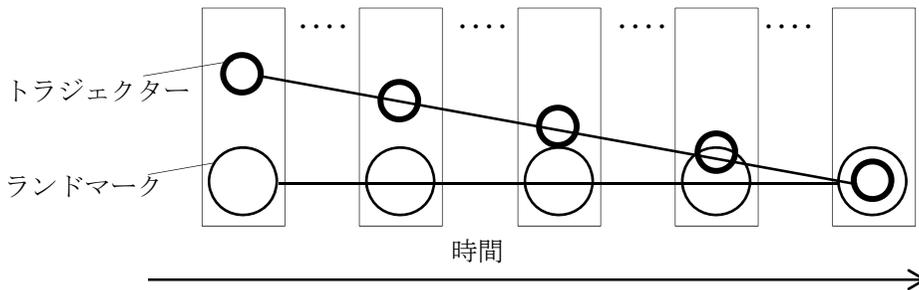


図 3 統括的走査と順次的走査

(F.ウンゲラー, 池上訳, 1996, p.236)

「統括的走査」と「順次的走査」の例を挙げると、

(3) ボールはカーブした。(大堀 2002, p.19)

(4) 彼はカーブを投げた。(同上)

(3)は「順次的走査」で、(4)は「統括的走査」である。(3)でトラジェクターは「ボール」で、ランドマークは「地面」である。ボールを投げた瞬間からボ

¹⁷ 事態に関与するどれか1つあるいは2つの参与体に注目して、当該事態の認識は行なわれるのだが、際立ちが高く第1に注目される参与体をトラジェクターと呼ぶ。

¹⁸ トラジェクターの次に際立ちの高い第2に注目される参与体をランドマークと呼ぶ。

ールが地面に落ちるまでの過程が、無数の処理段階に対応する個々の画像に分割される。これらの画像は少しずつ異なっているが、最終的にはトラジェクターのランドマークへの移動を表している。

(4)は(3)と違い、ボールの移動について、個々の段階を表すのではなく、その結果を総括的に表したものである。

以下、このような見方で、形容詞的用法の分布が捉えられることを示す。人間が事態を認識する時、いかなる走査で事態を把握し、またその走査の仕方によって複数ある形式の中からある 1 つの形式が選ばれるかについて具体例を挙げて見ていくことにする。

5.2 「テイル」形の「順次的走査」と「統括的走査」

5.2.1 項が2つ以上ある場合

(5)(6)は、項が2つ以上現れている場合の「こと」の「テイル」形である。

- (5) 5万ドルはするダイヤ・ブローチを見るたびに、彼女は自分が上昇気流に乗っていることを確認できた気になる。
- (6) 日本のバレーボール・ファンなら、特にブラジルの男子チームが常に世界大会で好成績を残していることをご存じだろうが、実はブラジルのスポーツはサッカーだけではない。

(5)の「乗る」は主体変化動詞、(6)の「残す」は主体動作・客体変化動詞である。

(5)の連体修飾節の構造を見てみよう。

- (5) [自分が 上昇気流に 乗っている] こと。
 主語 補語 述語

(5)の「こと」の連体修飾節は文の構造をしている。それでは、なぜ項が2つ以上ある場合、「テイル」形が多く使われるのか、その原因を考えた時、人間が異なる走査の仕方でも事態を把握することが考えられる。これを図3に示した「順次的走査」の図で考えてみると、主語である「自分」がトラジェクターで、補語である「上昇気流」がランドマークである。

図4は、図3の「順次的走査」と「統括的走査」両方の組み合わせで構成されていると考えられる。図4に示したように、(1)～(4)の間の過程と(4)以降の過程が「テイル」形で表され、(4)のトラジェクターとランドマークが一体化になった時が「タ」形で表される。

(1)～(4)の間は、上昇気流に乗るまでの過程で、乗り始めから乗り終わるまでの画像は連続して存在し、少しずつ異なっている。(1)～(4)は、結果状態に至るまでの主体の動作と位置変化を表しているため、アスペクトの「テイル」形であると考えられる。(4)以降は、動作完了後の主体の状態を表しており、この過程では、主体の状態に変化が生じないので、同様の画像の連続として表される。形容詞は元々状態を表すものなので、(4)以降は「状態の継続」を表す形容詞的用法の「テイル」形だと考えられる。

って決まると考えられる。

5.2.2 項が1つの場合

(9)(10) は、項が1つ現れている「こと」の「テイル」形である。

- (9) もし3日経っても返事がこないのならば評価欄より「どちらでもない」にしてサイズが違っていることを明記してご連絡お待ちしております。
- (10) 汝の妻が優れていることを知ったならば、家で（あまりに）監督し（すぎ）てはならぬ。

(10) の構造を見てみよう。

(10) 妻が 優れている こと
主語 述語

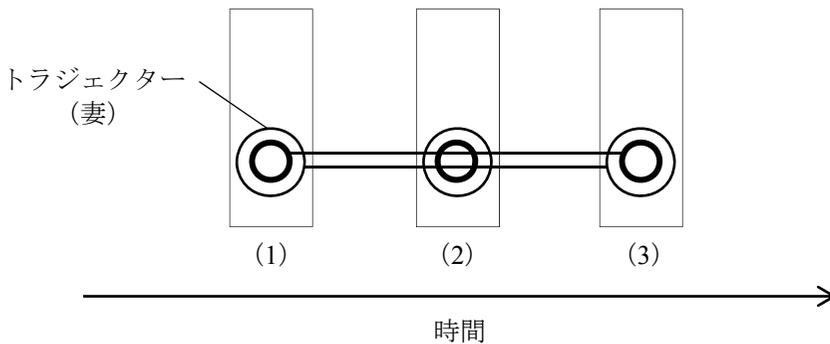


図5 「妻が優れている」の「統括的走査」

(10)では、図5に示しているように、「妻」がトラジェクターで、ランドマークは文中に現れていないが、ランドマークとして考えられるものは存在する。妻の属性をランドマークと考え、その属性は一瞬で消えたりするものではなく、トラジェクターが存在しているかぎり、存在し続けると思われる。従って、「属性の継続」を表す形容詞的用法の「統括的走査」の「テイル」形が使われると考えられる。

(11)(12)は、項が1つ現れている「もの」の「テイル」形である。

- (11) 裁判が始まる前に裁判所の2階でハツエと話そうとした時にハツエがちらりと自分に向けた眼差しと、それが同じ眼差しであるのに気づいたが、その目が意味しているものを、いまだに読み取ることができなかった。
- (12) ネコヤナギは、標準和名のネコヤナギとは別に、花の状態が似ているものを総称してネコヤナギという場合があります。

(12)の構造を見てみよう。

(12') 花の状態が 似ている もの
主語 述語

(12')も(10')と同様、同じ構造をしている。(12')の場合も独立した物一花が存在し、花の属性とも言える状態を対象にしている。無数にある花と花の似ている状態が変わらず続いていることから図4の(4)以降の画像で表すことができる。

(9)~(12')のように、項が1つ出現している「テイル」形で(9) (10)で「こと」が選択される理由は、「こと」が指す物が「現象」を表すものであるからだと考えられる。(9)では「サイズが違っている」事を、(10)では妻の属性とも言える「料理が得意である」事や「仕事ができる」事など「動作」や「現象」を指しているからだと考えられる。

(11) (12')で「もの」が選択される理由は、「もの」が「具体物」を表すからだと考えられる。(11)の「もの」は、「ハツエが何かを伝えようとしている内容」を、(12')では「植物」のような「具体物」を指しているからだと考えられる。

以上、項が1つある場合を見てきたが、ここでは主体変化動詞と静態動詞しか現れていない。これらの動詞は、「状態の継続」や「属性の継続」を形容詞的用法の「統括的走査」により捉え、「継続」という意味から「テイル」形が使われると考えられる。

5.2.3 項がない場合

項が文中に現れていない「こと」の「テイル」形はわずか3例で、「もの」の「テイル」形は、「着る」という動詞以外には使われていなかった。

- (13) 人間は、今、自分の抱えていることをすべての基準にしてしまう。
(14) 「さあ、着ているものを全部脱いで下さい」またか、と恵子は思った。

(13)(14)の構造を見てみよう。

- (13') 自分の (抱えている) ことを すべての基準にしてしまう。
目的語 述語
(14') (着ている) ものを 全部脱いで下さい。
目的語 述語

(13') (14')は、「抱えていること」「着ているもの」が全体として1つのまともりになって、目的語の役割をしていることが分かる。1つの名詞に相当する役割をする時、「統括的走査」により「タ」形が使われるはずだが、「着る」という動詞に「テイル」形が多いのは、人間の視覚的な表示が「順次的走査」の場合に認知しやすいからである。「着ているものを」に後接する動詞は、ほとんど「脱ぐ」という動詞であったが、人間が視覚的に捉えやすいのは何らかの結果が残っている状態であり、「着る」に「テイル」形が多いのも、この理由からだと考えられる。「着る」は主体動作・主体変化動詞で、主体の動作より主体の変化後の状態が焦点化されやすいので、同様の画像で、同じ状態の継続を

表している。

ここまでの考察で、「テイル」形に多い構文的特徴と項の出現数によるアスペクト形式の変化、それと形容詞的用法には「統括的走査」による「テイル」形が存在することを見てきた。

5.3 「タ」形と「統括的走査」

項の出現数が多いと「テイルこと」形が使われ、項の出現数が減っていくと「タこと」形が増える傾向があるが、項の出現数が多い時、「タこと」形が使われる場合もある。

5.3.1 項が2つ以上ある場合

(15) (16)は、項が2つ以上現れている「こと」の「タ」形で、(17) (18)は、「もの」の「タ」形である。

- (15) 祭器化を始めるのが中細形のみであるのは、阻止要因の作用の仕方—弥生人が扱う上での意識が両者で明確に異なったことを示す。
- (16) 今のような母子家庭とか老人に対して我々が本当にしっかりしたことをやっておけば、かえって公平になる。
- (17) 同僚は豆腐花に、パイ生地包みスープ風にパイ生地が乗ったものをオーダー。
- (18) 私達は、子供が他人と違ったものを見せびらかして持っているのを、主体性をもっているなどと思う錯覚に陥ってはならない。

(16) (18)の構造を見てみると、

- (16') 我々が本当にしっかりしたことをやる。
主語 目的語 述語
- (18') 子供が他人と違ったものを見せびらかす。
主語 目的語 述語

(16') (18')は、同じ構造をしている。(16')の「こと」の連体修飾節は文の形をしているのではなく、[動詞+こと]で1つのまとまりになっていることが分かる。つまり、[動詞+こと]が名詞に相当する語として使われている。(18')も同様である。(図6を参照)

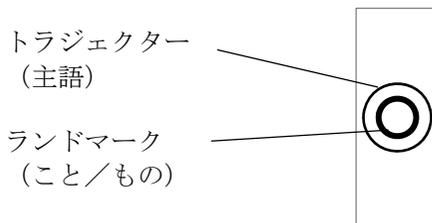


図6 「動詞+タこと/もの」が表す「統括的走査」

[動詞+こと][動詞+もの]が名詞として認識される時、「タ」形が使われるの

同じ事態であっても、その中から何を焦点として捉えるか、あるいは、どのような構文によってその事態を表すかはさまざまである。それは、仮に客観的に見て同じ事態であっても、話し手がそれを解釈し概念化する方法が一樣ではないためであると考えられる。

今回は、「もの」と「こと」の連体修飾節の形態的特徴により「タ」形と「テイル」形が選択されることを見たが、今後は、具体名詞と「こと」「もの」の間に位置する名詞のグループについて検討し、被修飾名詞の分類から見た時、アスペクトの形式にどのような規則があるかさらなる考察を続けたい。

参考文献

- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会。
河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社。
金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」、田窪行則編 (1994) 『日本語の名詞修飾表現』 くろしお出版。
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房。
江田すみれ (2003) 「「た」形連体修飾と自動詞・他動詞の関係について」 杏林大学外国語学部紀要 (15) pp. 49–61。
——— (2004) 「「た」形連体修飾の語彙的な形をめぐって」 杏林大学外国語学部紀要 (16) pp. 55–72。
F.ウンゲラー/H.-J.シュミット著、池上嘉彦ほか訳 (1998) 『認知言語学入門』 大修館書店。
高橋太郎 (1973) 「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」 (高橋太郎著 (1994) 『動詞の研究：動詞の動詞らしさの発展と消失』 むぎ書房、に収録)。
——— (1994) 『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』 むぎ書房。
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版。
中村芳久 (2004) 『認知文法論Ⅱ』 大修館書店。
森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房。
山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』 大修館書店。

Adjectival Uses of Noun-Modifying Clause and Mental Scanning

CAI Mei-hua

Focusing on Japanese formal nouns *mono* and *koto*, we pointed out that the former is likely to select as its modifier a clause ending with *-ta*, and that the latter is likely to select as its modifier one with *-teiru*, and discussed their variety. We also proposed that this selection involves the mode of mental scanning of events. The clauses modifying the formal noun, *mono*, which represents an entity-like event, are likely to end with *-ta*, while those modifying the formal noun, *koto*, which

represents a factual event, are likely to end with -teiru. The morphological selection between the clauses ending with -ta and those ending with -teiru hinges on the number of the arguments which the verb of the relevant clause has: the greater number more or less selects a clause ending with -teiru, while the less number more or less selects one with -ta. Both of the adjectival uses of clauses ending with -ta and -teiru are for “integrated” scanning, one mode of mental scanning of events. In our paper, thus, we attempted to identify conditions for selecting between clauses ending with -ta and -teiru, not by the semantic difference between their ending aspects, but from the viewpoint of which aspect each of the nouns selects in the clause modifying it semantically.

Keywords: number of arguments, scanning, aspect, adjectival clause